



## 魅力ある学習指導案を

牧野 満

学習指導案が魅力ないものになってしまったと感じるのは、私だけではないだろう。評価規準、評価基準が登場してきた辺りから、金太郎飴のような学習指導案が増えてきたのではないだろうか。私が教員になった30年前には、いろんな学習指導案があった。中には、誰が読むのか？という10枚以上綴られた学習指導案などもあったが、個性的な学習指導案が多かった。指導観、教材観も多様であり、授業者がどんなことに力点を置き、授業のどんな所を見てほしいのかがよくわかった。教師の顔が学習指導案に映し出されていたのだった。

ところが、今はどうだろう。「これはどこかで見たな」という学習指導案も少なくない。ネットの文言がコピペされ、指導書に書かれてある教材観がそのまま使われていることさえある。こうして学習指導案の画一化が進んでしまった。対象とする児童が違うのだから、同じ学習指導案などあり得ないはずであるが。

学習指導案がマニュアル化されると共に、授業の画一化も進んだ。研究授業

においても、子どもの発言をシートにチェックする姿がよく見られるようになった。もちろん、授業は評価と一体で進められるべきものだと思うが、評価規準の文言を逐一照らし合わせながら授業などできるのだろうか？ 授業とは常に流動的であり、子どもの発言を受けて、どう返すのか？ そこに教師の力量が発揮され、教師が発する一言一言が子どもに対する評価でもあるのだ。学習指導案の画一化が、授業の画一化が加速させ、面白味のない授業が増えてきたと感じるのである。

同志会が独自の目的を持って研究を進める団体である以上、巷に溢れる学習指導案とはひと味違う学習指導案を描けるはずだ。技術指導の系統性、スポーツ文化研究、グループ学習等が学習指導案に反映されるべきだろう。「魅力ある学習指導案を書いてみよう」—そんな契機になる特集になればと思う。

(まきの みつる／奈良・香芝市立下田小学校)